講演「大正期の新舞踊」

村松道弥

私は今はジャーナリストですが，大正期はただ音楽と舞踊が好きな愛好者でした。洋舞は今ではバレエと現代舞踊と二つに分かれていますが，当時は，邦舞と洋舞という分類でした。新舞踊という語はどちらかというと，邦舞の方の新しい舞踊運動につけられた言葉と思います。

私は大正5年，17歳の時に東京，本郷座で石井漠の舞踊詩「明闇」を見たのが舞踊の見はじめでした。ですから，それ以前の事はものの本を見てお話します。

帝国劇場　まず，洋舞の新舞踊の原点になる，石井漠，高田せい子，小森敏，という明治末期の舞踊家がどうして生まれたのか，その背景になる帝国劇場について述べなければなりません。昔の帝国劇場は，今日のビルディングとは違って，西洋の劇場建築のように，両側に広い広場があり，皇居の向かいにふさわしい，ゆったりとした空間の建て物でした。屋上には翁の像が飾ってありました。財界の渋沢栄一，大倉喜七郎，等が中心になって，皆がお金を出し合って，西洋の国立劇場に代るものを作るのが意図でした。客席は3階迄で舞台は広くて使いやすい劇場で多くの舞踊やオペラが上演されました。しかし，財閥がやりましたから，経営の問題でしょうか，結局，歌舞伎が中心の興行でした。劇場は今までの歌舞伎座，新富座，本郷座，等の桝席を排除しまして椅子席にし，食堂を設け，入場券も茶屋制度の販売という旧幣を撤廃しました。

帝国劇場では，他に女優劇をつくろうとして女優を養成しましたし，柴田環（後の三浦環）を連れてきて，歌劇の上演を企画し，歌劇部もうけ創作歌劇「熊野」を上演しました。歌劇部の第一期生の中に，後に舞踊家になった石井林郎（後に石井漠），柏木敏（後に小森敏），原せい子（後に高田せい子）の三人がいました。原せい子は，はじめ声楽の原信子の養子だったのですが，途中から舞踊に転じました。第二期生には高田雅夫（原せい子と結婚），石井行康，等がいました。石井行康（現在，バレエ振付家として活躍している石井潤の祖父）は，浅草オペラ，宝塚少女歌劇の講師になり，京都に研究所を設けました。

伊藤道郎は歌劇部の柴田環の弟子で「熊野」でエキストラに出ています。舞踊の方では出ていません。「舞踊学13号別冊」に片岡康子さんが「伊藤道郎はローシーの弟子」と書いてありましたが，この記述は誤りです。伊藤道郎は声楽希望で，19歳でフランスに渡りオペラを聞きますが，その声量の違いに驚きます。パリでディアギレフバレエのニジンスキーの「バラの精」やイサドラ・ダンカンの舞踊を見て舞踊を目ざすのです。ある時，新聞でドイツ，ドレスデンのダルクローズの学校のリズム体操を見て，すぐに見学に行き感激，そこに入って2年間勉強しました。ですから，伊藤道郎はダルクローズの系統の人です。第一次大戦の開戦の前日，ドイツを逃れてロンドンへ行き，能の「鷹の井戸」を舞踊化し，好評を得ます。その評判を聞いて，こんどはアメリカに招かれます。「伊藤はアメリカ芸術舞踊の草分けで，フランス近代音楽をアメリカに紹介したことと，イサドラ・ダンカン系の踊り手」と本に紹介され，高い評価を得ています。

浅草オペラ　大正3年，高木徳子がアメリカから帰国，日本最初のトウダンサーというのを売り込んで，帝劇等で踊り，しばらくして，オペラ，舞踊の作，演出家・伊庭孝と組んで，浅草に進出，川上貞奴一座とも合同して，甲府，等で公演を行っています。

大正5年，石井漠は，いままでの洋楽伴奏の舞踊でない“舞踊詩”を発表します。これは，ドイツから帰って来た小山内薫と山田耕筰のすすめでダルクローズのリズム体操の話が基になっています。つまり小山内薫の新劇場第1回公演で，30人の観客でした。第2回の本郷座の時は観客が6,7人。私はみています。「明闇」を小森敏と踊りました。大変面白い作品でして，二人はなかなかいいコンビでした。「明闇」はその後，石井みどりさんや門弟と何回か上演しています。第3回は，劇場をさけて，保険協会ホールという所で上演しています。石井漠の舞踊詩運動はこれで終ります。

大正5年7月，帝国劇場附属歌劇部，洋劇部は解散します。石井漠は，新劇場第3回公演を終えて，宝塚少女歌劇に振付師として，就職します。

大正6年，小森敏は一時故郷に帰っていたのですが，大阪近松座で石井漠と小森敏で近代舞踊大会を開き大好評を得ます。これが売れて1500円のギャラで京都公演も行います。ギャラをもらって踊ったはじめということです。

高木徳子は川上貞奴一座と合同して地方巡業して大正6年帰京，東京赤坂演技座で独立して公演し，あと浅草常盤座，等にも出演しました。

大正6年10月，流行新作家の佐々紅華が中心となり，東京歌劇座が浅草日本館を本拠に誕生，石

井漠も参加します。

当時，帝国劇場が最抵三階席で１円の入場料だったのが浅草では10銭でみれたのですから大変なにぎわいをみせました。金竜館のオペラ，常盤座の新派，キネマ倶楽部の映画と三館共通で15銭という時もありました。私もよく通ったものです。

浅草オペラは，大正６年１月，伊庭孝と高木徳子の一座が常盤座で上演した「女軍出征」というオペレッタが始まりとされています。第一次大戦当時の流行歌「ダブリン・ベィ」や「チッペラリー」などを入れたしゃれたものでこれが，大ヒットします。それから高木徳子の「スネイクダンス」を見ましたが，大変好評でした。

大正７年４月，伊庭孝，高木徳子，高田雅夫，等で「歌舞劇協会」を作り，同年10月有楽座での「歌舞劇協会」での公演ではハブトマ原作の歌舞劇「沈鐘」を石井漠と高木徳子が共演し好評でした。

大正８年，清水金太郎（帝国劇場声楽講師），清水静子，田谷力三，安藤文子，等が「七星歌劇団」を結成，金竜館で上演します。このように，集散いとまなく浅草オペラは全盛をきわめます。

浅草オペラは大衆的であると同時に，大衆にこびなければならない所がありました。一日三回，日曜・祭日には一日六回興行という事がありました。

石井漠は「浅草じゃ芸術は育たない」と感じて，日本館をやめ，根津興行に移り，地方巡業に出ます。そして，ドイツに渡ります。

高田せい子も根津興行に籍を置きましたがゆきづまって休養と新らしいネタを仕入れるためにニューヨーク，パリ，ロンドンの巡行に出ました。

大正12年９月，関東大震災の報を聞いて，高田せい子は大正13年帰国，赤坂に舞踊研究所を設けます。石井漠は大正14年帰国，石井小浪と武蔵境に舞踊研究所を設けます。

二人とも，結局，浅草へは返らないのです。いままでの浅草オペラの興行は，バラエティーで，寸劇とか舞踊，等がまざり合っているのです。今度は舞踊家として独立し独自性をもって活動を続けなければということになるわけです。これが日本の洋舞の始まりと云っていいと思います。

その他の活動　小森敏は，ニューヨークで，山田耕筰，伊藤道郎と舞踊会をやっています。小森は東洋的なもの，伊藤は剣をもって「鞭声粛々（べんせいしゅくしゅく）」を踊ったというのです。この後小森はフランスで東洋舞踊研究所を12年間開設するのですが，どうして12年間もやれたのか研究の余地があると思います。帝国劇場ではローシーが洋舞の教師ですが，邦舞に水木歌若と先代若柳吉登代がいたのです。小森はそこで邦舞を勉強しているのです。石井漠にも東洋的なものがあるといいますが，そういう所に外国にも受けたことがあるのかもしれません。

以前，小森と永田龍雄と渥美清太郎と私で吉登代の家に遊びにいった事があります。その時，渥美さんの三味線で小森が「梅にも春」を踊りましたが見事なものでした。それから藤蔭静枝（後に静樹）がパリでリサイタルをした事があるのですが，二人で「かっぽれ」踊って好評を得たそうです。やはり，東洋的なものを持っていたので12年間やれたのだと思います。

岩村和雄は，築地小劇場の照明をやっていたのですが，「ダルクローズのリズム体操を照明にとり入れてやってみたい」とドイツに渡るのですが，やはり照明ではダメで，肉体だと解り舞踊家に転向します。ただ，舞踊家では食べていけないので再び築地小劇場で照明をやりながら俳優にリズム体操を教えていました。

山田五郎は，築地小劇場の事務にいたので，岩村和雄からリズム体操を学び，「猩々」というすぐれた舞踊を作ります。山田は小さい時，能を習っていて，そういう東洋的なものがアメリカで受けたようです。

その頃，舞踊研究所が次々独立して開設します。帝国劇場には世界の一流の人々がやって来ました。アンナ・パブロバ，アルヘンティーナ，梅蘭芳，デニーショシ，等が来日し音楽・舞踊の普及，ファンの拡大に果した功績は大です。

今と違って大変いい時代で，一度東京で評判をとった作品は，はじめは持ち出しですが地方興行として売れました。それで儲けて赤字をうめていまして，大正の末から昭和の初めにかけて門下生が次々育ちます。

石井漠門下では，妹の石井栄子，姪の石井郁子，崔承喜，石井みどり等。

高田せい子門下では，藤田繁，益田隆，江口隆哉，等。

岩村和雄門下では，三木一郎，千葉躬春，等です。そして又その孫弟子と今日の洋舞が盛んになったのです。

邦　　舞　邦舞の方の新舞踊は，この後のシンポジュームにゆずりますが，やはり先覚者は藤蔭静枝（後の静樹）です。

大正６年５月，第１回藤蔭会を常盤木倶楽部（今の東京日本橋，西川ふとん店横）で開催しました。集った人は藤間静枝（後に藤蔭静枝，静樹）藤間藤代，藤間勘次の三人。この時は新しい作品はなかったのですが，第８回大正９年11月，に新しい作品，香取仙之助作の「浅茅ケ宿」を発表，第９回大正10年５月，には「思凡」を発表しました。これは，帝国劇場で梅蘭芳も演じたもので，福地桜痴居士の息・福地信世が中国の昆劇のスケッチを50枚位書いてきまして，「伝統の呪縛から

の解放」を象徴，大変な好評を得ました。藤蔭静枝が新舞踊家としての確立した作品です。その他には，第11回大正11年11月，宮城道雄の器楽曲「落葉の踊り」と「秋の調べ」を踊っています。当時，新しい作品でも歌詞のあるものだったのですが，無歌詞のものを初めて手がけて評判を得ています。岡田嘉子，等門弟の人達も踊っています。

邦舞の方も，帝国劇場が招いた外国の各舞踊家達の影響を受けて，次々と新しい舞踊家が出てきます。

花柳徳次（後に花柳珠実，五條珠実）は，大正8年4月花柳徳太郎の柳桜会で，新曲「文ぐるひ」を踊り，同年11月同会で，“新舞踊”とうたって「惜しむ春」を踊っています。珠実の傑作は二世花柳寿輔（後の寿応）の「第2回花柳舞踊研究会」（大正13年9月）で踊った「春信幻想曲」です。これは町田博三（後に佳聲）の作曲，バイオリニストの鳥居維子の和洋合奏曲で，浮世絵の春信描く笠森おせんと若衆とのデュエットで，画期的な作品でした。

花柳寿勇（後に花柳寿美）という人も「花柳舞踊研究会」で活躍，後に曙会を作ってスケールの大きな新舞踊を作りました。

三人共，新橋の芸者の出身でしたが，芸者をやめて，舞踊家として独立して立った人達です。

林きむ子の「銀閃会」などもありますが，その後，令嬢舞踊家が三人出て参ります。西崎緑は西川流から独立，高橋是清の孫・藤間観素娥は茂登女会，そして藤間喜与恵は「喜与恵会」で新舞踊を発表しております。

この後シンポジウムに出られる吾妻徳穂さんは15世市村羽左衛門と藤間政弥の子で，藤間春枝として昭和5年春藤会をもって舞踊家として出発，新舞踊でも大活躍します。

歌舞伎俳優の人達の新舞踊の活動もありますが町田博三は中外商業新報に「歌舞伎の人達は流行に追われて充分準備をしないで会を開いていたので早く途切れてしまった」と書いています。

シンポジュウム「大正期の新舞踊」

吾妻徳穂　西形節子
村松道弥　市川　雅（司会）

市川　出席の吾妻徳穂先生はニジンスキーの娘が書いている本の中で「私は吾妻に会っている」とあります。それはアヅマカブキが戦後ヨーロッパ・アメリカを公演したとき，ヒューロックという大プロデューサーが吾妻先生を各地に紹介した時のことだとおもいますが，大変国際的にも戦後直ぐに気を吐いていただいた方です。まず，西形先生の方から別表（８頁〜10頁）をもとに大正期の新舞踊について，コメントをいただきたいと思います。

西形　村松先生のお話で大正期の新舞踊の動向は十分お分かりになったと思いますが，こちらの方は日本舞踊を中心にしています。前回の「近代舞踊の出発３」では坪内逍遥を取り上げました。1904年（明治37年）『新楽劇論』を以て一大革新の口火を切った逍遥の壮大な理想はなかなか実現せず，過渡期の当用にと「お夏狂乱」などの小規模の舞踊劇を書き，文芸協会で試演していました。ところが大正２年，文芸協会の解散，逍遥は苦境にたたされ，新舞踊運動は挫折。それに代わって長谷川時雨が「舞踊研究会」で活躍をします。時雨は1879年（明治12）生れ，1905年(明治38)懸賞戯曲に当選，女流劇作家として認められました。「舞踊研究会」の舞台となった紅葉館は時雨の母の経営で，当時，京舞の三世井上八千代（片山春子）や五世藤間勘十郎が出張稽古にきていました。第一回に尾上梅雄少年（六世勘十郎＝勘祖）が出演。第二回には片山春子が「鉄輪」・五世勘十郎が「鷺娘」を踊っています。『演芸画報』を見ると，ともに素の形（地の髪，黒紋付きの着物）で，大正の舞踊家というより女師匠の様子が分かります。第四回は歌舞伎座に進出，六世尾上菊五郎・二世市川猿之助（猿翁）と新橋名妓連中も出演，新作「空華」などが発表されました。ここに逍遥の手紙があります。

「お返事申し上げ候　お申し越しの件　実に以てお安き御用には候えど　敗軍の将兵を語らずとやら　今は何の手助けもいたしかね候　先日の空華面白く拝見　そのうちお目にかかって所見はもうしのぶべし

時雨様　　逍遥　」

（『逍遥研究』大村弘毅氏の論文より）

この時期，失意の逍遥と得意の時雨の対照がうかがえる資料と思います。

時雨は第五回に「江島生島」を発表。当時高額な二円の入場料を取った豪華な発表会でしたが，大正３年六世菊五郎の「狂言座」発足以降舞踊を離れ，大衆作家三上於兎吉との恋愛，『女人芸術』の編集など文芸方面に活躍しました。時雨の舞踊運動は古典に重点がかかり新しいものへの限界はありましたが，一つの掛橋となったと思います。この時代新橋の大師匠として指導していらっしゃいました藤間政弥師は吾妻先生の母君，当時をよくご存じの吾妻先生から伺いたいのですが……

吾妻　長谷川時雨先生には，「清元お葉」と「芝金」という作品をかいていただきました。それをお願いにいったときは今の旦那様（三上於兎吉）とご一緒で，とてもさっぱりした方で“今主人をお風呂にいれるから冷たいものでも飲んで待っててちょうだいね！”旦那様がちょっと半身不随みたいだったんですね，たすきをかけてお風呂にいれてから“ごめんなさい！なにやるの？”って聞いて下さいました。それで私は二つの作品をいただいたのです。

西形　このように体験的なお話を交えながら，進めて参りたいと思います。

さて，時雨は六代目菊五郎と「狂言座」をつくりますが，二回で終ります。ここで逍遥の大作『新曲浦島』が上演されますが，全幕ではなく中の幕だけでした。時雨の作品は『歌舞伎草子』，これは後に「藤蔭会」で『出雲のお国』の題で藤蔭静枝（後に藤蔭静樹）が取り上げます。先程，村松先生のご講演にもありましたように，大正のはじめは洋舞の方に新しい展開があり，日本舞踊の方は逍遥の呼び掛けに対して今一つというところでした。そこに藤蔭静枝（静樹）が登場します。

吾妻　藤蔭先生は風靡しましたね。私の母より下の（勘翁の）お弟子さんでしたが，藤原義江の“どんとどんとどんと…”というあの頃はやっておりました歌「出船」で，まだ新橋の芸者のときに余興で踊ったんです。皆びっくりしましてね。うちの母も旧いほうですから，また芸者の中でもいろいろありまして，やっぱり舞踊家で立ちたいということで芸者をお止めになったのです。そして永井荷風さんとご一緒になられて，それから新しいことを始められたのでしょう。

西形　でも，永井荷風との結婚生活は短かったのでしょう。一年足らずで…。

吾妻　晩年，私が伺うと，一杯召し上がりながら〝なんつっても永井荷風が好きなのよ〟といっつもおっしゃってました。やっぱり，先生はよっぽどお好きだったんですね。私も何度かご一緒に藤蔭先生の会に踊らせていただきましたが,戦争(第二次世界大戦)が始まりかけた頃でしたか…お箏の伴奏で初めて公会堂で踊ったときのことです。先生は少しお歳を召したか振りを全然覚えていらっしゃらないのです。私は覚えていましたが先生はどんどこどんどこ振りをうめちゃうのです。私はもうびっくりしてこれは付いてくよりしょうがないと，一段どう踊ったか夢中でした。私の分まで踊ってしまい，そうかと思うとチョンと座ってしまい〝あなたの番よ〟というんです。藤蔭先生はそういう方でしたが，とってもいい方でした。そして大変人間味のある先生でした。やっぱり新舞踊の元祖といわれる方ですし，藤蔭先生がお立ちになったから今日の我々があるのだと私は確信しています。

市川　吾妻先生のお母様は藤間政弥さん，藤蔭静枝(静樹)に対しては批判的なところがあったのでは…

吾妻　はい，そうです。第一，お師匠さんの藤間勘右衛門(後に勘翁)に対して失礼だというのです。それが勘右衛門の奥さんの遠い親戚になられるとかで，割に自由に振る舞っておられましたが，私の母などは旧いほうですし，名取筆頭でしたから，だらしがなくなると怒りました。ピアノで踊るなんて踊りじゃないといっていた母でした。それが私のようなものができまして，舞踊家になりましてから母の生きているときから，ピアノで踊ったりいろいろしましたもので〝世の中，変わったんだねえ…お前〟といっておりましたから，自分の子によって時代が変化したことを認識したのだと思います。

西形　村松先生もおっしゃってましたが，おもしろいことに日本舞踊の三人の舞踊家が地方の出身であったとおっしゃってましたが…

吾妻　そう，藤蔭先生は新潟，珠実(初代五條珠実)さんが秋田，寿美(初代花柳寿美)さんが浜松でしたか…

市川　それから，三人に共通するのは芸者ということですね。

西形　それは村松先生もおっしゃっておられましたが，おさなくして上京されているので，吾妻先生がおっしゃるように江戸っ子的な気質を持っていたようですが…－。しかし，シャイな江戸っ子にはないガムシャラなところがあったと思われます。藤蔭静枝(静樹)の業績をまとめると…

1. 藤蔭会という舞踊研究団体を作ったこと。
2. スタッフに良き同人を得たこと。田中良・福地信世・遠山静雄・町田博三(後に町田佳聲)らが無報酬で協力。
3. 静枝自身モルモットとなり，若い同人が商業劇場に無い試作的な舞台装置・照明が得られた。
4. 舞踊家兼振付の先駆となった。
5. 本居長世の童謡運動に参加，童謡・民謡詩などに振付する。
6. 全国各地に旅公演，舞踊の普及活動。そのことは，先頃(1990年11月公演)の東京芸術劇場の柿落としの新劇団合同公演「東京行進曲」のモデルとなって登場。

後に，静枝は前記同人と別に，三田文学の勝本清一郎と親しくなり，作品の傾向も変わってきますが，昭和の初め，失恋してパリ留学したと聞きますが，村松先生，ごぞんじでしょうか？

村松　知ってますよ。勝本君は静枝の恋人でした。

西形　藤蔭静枝(静樹)に続いて，花柳徳次のちの五條珠実が『惜しむ春』でデビューします。この時に，作者の香取仙之助が〝いささか野心的な新しい純舞踊として書いた。これまで新曲といっていた代わりに〈新舞踊〉という言葉を用いた〟といっていますが，この頃から新舞踊が定着してきたのではないでしょうか。そして別表(8頁～10頁)に書きましたように，1921年(大正10)という年が大正期の新舞踊運動が一気に活発になるときと思います。楳茂都陸平の『春から秋へ』藤蔭静枝(静樹)の『思凡』の話題作。そして前年発足した「春秋座」で二世市川猿之助(猿翁)がロシアンバレエに刺激されて『虫』を発表します。吾妻先生『虫』を御覧になりましたか？

吾妻　素敵ですね。今でもどっかで取り上げてやったらいいと思いますよ。虫の感じでひらひらしたものを着て，ちょっと洋舞に似ています。四季になっていまして冬にちんころがいっぱい出てくるんです。これはご兄弟三人で－猿之助(猿翁)さん・八百蔵(後に八世市川中車)さん・(市川)小太夫さん－素敵でほんとに目についています。

西形　当時の朝日新聞，毎日新聞，読売新聞はじめ，都新聞，万朝報など，ほとんどが取り上げているのですから，『虫』はよほど話題になったのですね。また，歌舞伎役者がはじめて新しい舞踊に取り組んだということが冒険であり，偉いことですね。

市川　猿翁のそのあとの作品は？

吾妻　それと…なんという作品でしたか「釈迦と孫悟空？」あちらはもともと腰がいいでしょ。長い棒を扱いながら，降りたり上がったりなさるその舞台が素晴らしかったですね。

市川　今の話の中でディアギレフのロシアンバレエ団の事でちょっと…大正元年が1912年，その年にローシーがきているのです。ロンドンのアル

ハンブラ劇場のミュージックホールに在席していたのですが，ディアギレフバレエ団があまりにも優勢であったがために，ミュージックホールは没落し，追い出されてローシーは日本にやってきたという…歴史の裏側にはそういう事実があるのです。三島章道編『ロシヤバレエ』という本が大正10年ぐらいにありますし，大田黒元雄の『ロシヤ舞踊』も大正６・７年には出ています。その様な背景がありまして，新舞踊運動にはロシヤバレエが影響しているということは事実であるとおもいます。

西形　それと，第一次大戦後の日本は軍需景気の活況という経済的な社会背景もあったのではないでしょうか。それが次の「羽衣会」「踏影会」という贅沢な豪奢な歌舞伎俳優による新舞踊という形になったのではないでしょうか。これが大正11年から始まります。演目その他はパンフを参照していただき，実際にご覧になった先生がたからその模様を伺いましょう。まず，慶ちゃんの愛称で人気，美貌の女形五世中村福助の「羽衣会」は…

吾妻　「水と鳥」では今の（中村）歌右衛門さんが子役の傷付いた鳥で，カーテンの前を福助さんがビーズのついた豪華な衣掌を着てさーっと通るのですが，その時代にビーズというと目を見張ったものですが，それがチカチカ光って…それにオーケストラですから大変な費用でしたでしょう。

西形　劇界の大御所といわれた五世中村歌右衛門を父に持つ福助の「羽衣会」は，舞台美術を各幕ごとに高名な画伯に依頼するなど，当時のサラリーマンの月給にも匹敵する10円の入場料が売り切れても赤字だったというほどの贅沢な発表会だったそうです。山の手風といわれた「羽衣会」に対し，「踏影会」はどちらかといえば下町風ですが同じく美しい若女形のアイドル尾上栄三郎の会。栄三郎は六世尾上梅幸の息子，六代目菊五郎も応援また，美貌の立役若手の市川男女蔵（のち三世市川左団次）も参加しました。『演芸画報』の写真から当時の舞台を思い出していただきましょう。写真を見ても当時としてはずいぶん奇抜ですね。この「抱影」など洋舞のタイツ姿で水に移った月を掬い取ろうとする踊りのようですが…

吾妻　実際にそうでした。それと「刺客」六代目菊五郎もでたのですが，音楽がダダドダドダト…とこんな感じだったんです。今でも耳についています，とっても面白くって…こんな踊りもあるんだなあと思って，素敵でした。

西形　大正12年の春，「羽衣会」「踏影会」ともに第二回を催しますが，その年の９月，関東大震災に見舞われ，これでほとんど終わってしまいます。「羽衣会」は震災後も第三回の公演をしますが，まもなく栄三郎も福助も若くして亡くなります。それにしてもこうした派手な会は経済的にも続かなかったのではないでしょうか。

▼「蟲」二世市川猿之助（猿翁）（大正10年11月明治座、「春秋座」第二回公演）

吾妻　でもおできになったでしょう。梅幸さんの方はどうか判りませんが歌右衛門さんちは出来ましたでしよう。栄三郎さんがお亡くなりになりさえしなければ…。

西形　一見華やかで豪奢な歌舞伎俳優の新舞踊運動は花火のようで，自身の内面的な欲求からではなく準備もないままに立った芸の道楽だという評もあったようです。逍遥の言葉に「一時的より持久的に，公演の前に二回試演せよ。一年半は公演をするな」とありますが…内容はいかがだったのでしょうか？

吾妻　でも私たちは，何と素敵なことをやっているのだろうと羨ましく思いました。私はまだはっきりした舞踊家になっていませんでしたけれど。

註－この頃，吾妻徳穂は帝劇女優八期生として修行時代。

西形　関東大震災によって一つの時代が終わりを告げ，やがて新しい担い手が登場します。大正13年の「花柳舞踊研究会」のスタートに始まり昭和に入って新舞踊のスターたちが一斉に活動を始めるのですが，これは次の機会にいたしまして…。

市川　そろそろ時間も迫って参りましてこの辺で…今日は久し振りに吾妻先生から昔の下町の東京弁を伺いまして，僕は大変嬉しく思っております。とても二時間では語り尽くせない大正期の新舞踊ですがこの辺で終わらせていただきます。

（文責・西形節子）